
参 考 資 料

(1)受賞者について

- 1 氏 名 ポール・S・アトキンス (Paul S. Atkins)
- 2 生 年 1969年
- 3 現 職 アメリカ合衆国 ワシントン大学 シアトル校 アジア言語文学科 教授
- 4 略 歴

(米国における略歴)

- | | | |
|-------------|-----------|-------------------------------|
| 1990年 | スタンフォード大学 | 学士号取得 (専門：英米文学) |
| 1994年 | スタンフォード大学 | 修士号取得 (専門：日本文学) |
| 1999年 | スタンフォード大学 | 博士号取得 (専門：日本文学) |
| 1999年-2002年 | モンタナ州立大学 | 近代言語学科 助教授 (専門：日本文学) |
| 2002年-2007年 | ワシントン大学 | シアトル校 アジア言語学科 助教授 (専門：日本古典文学) |
| 2007年-2016年 | ワシントン大学 | シアトル校 アジア言語学科 準教授 (専門：日本古典文学) |
| 2016年-現在 | ワシントン大学 | シアトル校 アジア言語学科 教授 (専門：日本古典文学) |

(日本における略歴)

- | | | |
|------------------|--------|--------------------|
| 1996年10月-1998年3月 | 東京大学 | 外国人研究生 (フルブライト奨学金) |
| 2001年9月-2002年8月 | 京都府立大学 | 客員研究員 (日本学術振興会) |
| 2006年4月-9月 | 南山大学 | 宗教文化研究所 客員研究員 |
| 2020年10月-11月 | 慶應義塾大学 | 斯道文庫 客員教授 |
| 2007年7月-現在 | 法政大学 | 野上記念能楽研究所 客員研究員 |
| 2001年-現在 | 明月記研究会 | 会員 |

(受賞歴)

- 2021年 セルデン記念翻訳賞 (コーネル大学より)
対象作品：絶海中津著『蕉堅稿』の英訳
- 2011年 シブレー記念翻訳賞 (シカゴ大学より)
対象作品：近松門左衛門作『長町女腹切』の英訳

(主要著作等)

著書

- ”The Demon-Quelling Style in Medieval Japanese Poetic and Dramatic Theory,”
Monumenta Nipponica, 2003
- Revealed Identity:The Noh Plays of Komparu Zenchiku,
ミシガン大学日本研究所, 2006
- ”Nijō v. Reizei:Land Rights, Litigation, and Literary Authority in Medieval Japan,”
Harvard Journal of Asiatic Studies, 2006
- ”Chigo in the Medieval Japanese Imagination,”
Journal of Asian Studies, 2008
- ”Meigetsuki, the Diary of Fujiwara no Teika: Karoku 2.9 (1226),”
Journal of the American Oriental Society, 2010
- ”Depictions of the Kawara-no-in in Medieval Japanese Noh Drama,”
Asian Theatre Journal, 2010
- ”The Word Monosugoshi and Changing Perceptions of Nature in Medieval Japan,”
Japanese Language and Literature, 2013
- 「アメリカの『明月記』」ーハーバード大学付属サックラー美術館蔵」,(『明月記研究』), 2005
- 「英語圏における禅竹研究」竹内晶子和訳 (「世阿弥ー中世の芸術と文化」), 2005
- 「言語の浮橋ー禅竹の謡曲を英訳すること」 (「能の翻訳ー文化の翻訳はいかにして可能か」
野上記念法政大学能楽研究所編) 2007
- 「辺獄の歌人『定家』から『明静』へ」 (「定家のもたらしたもの」日本女子大学日本文学科編)
翰林書房, 2018

編書

- Co-editor (with Davinder L. Bhowmik and Edward Mack), *Landscapes Imagined and Remembered*, *Proceedings of the Association for Japanese Literary Studies*, vol. 6, 2005

共著

- Sébastien Guillet, Christophe Corona, Clive Oppenheimer, Franck Lavigne, Myriam Khodri, Francis Ludlow, Micheal Sigl, Matthew Toohey, Paul S. Atkins, Zhen Yang, Tomoko Muranaka, Nobuko Horikawa, and Markus Stoffel. “Lunar eclipses illuminate timing and climate impact of medieval volcanism.” *Nature*, vol. 616, pp. 90–95, 2023

(2)受賞作について

- 1 著作名 『Teika : The Life and Works of a Medieval Japanese Poet』
- 2 出版年 2017年
- 3 出版社 ハワイ大学出版局

(3)贈呈理由

ポール・S・アトキンス氏は、ワシントン大学シアトル校アジア言語文学科で日本語教授を務めておられる。日本中世の古典文学、演劇および言語を専門とし、謡曲をはじめ、和歌から五山文学まで、さまざまなジャンルにおいて難解な古典テキストを精確に読み込み、的確な解釈を行いながら、着実に研究成果をあげてこられた。

今回の受賞作である『Teika : The Life and Works of a Medieval Japanese Poet』は、中世を代表する歌人「藤原定家」について世界で初めて日本語以外で書かれた研究書として、2017年に出版された。本作は、藤原定家が50年以上書き続けた日記、「明月記」にもとづく藤原定家の伝記、新儀非抛達磨歌と呼ばれ藤原定家が領導した新風歌風、「松浦宮物語」や「明月記」を素材とした和漢の問題を取り上げ、さらに明治期にいたる藤原定家の長い享受史にも及ぶなど、日本文学史上最も影響力のある歌人の一人として知られる藤原定家の名声の理由を探り、その作品について独自の議論を展開する。

また本作は、今日の日本の研究水準に伍しながら、処々に著者の新見を織り込み、藤原定家の人物、歌、著述さらに影響を総合的に捉え、藤原定家を世界文学の巨星として位置付けるべき意義を示した著作であると言える。著者が15年以上の歳月をかけて研究し、書かれた本作は、日本の詩歌、歴史、伝統文化に興味のある人にとって必読と言える作品である。

著者は、藤原定家の日記を論読、研究する「明月記研究会」に参加し、難解な和漢文・記録体の解読を会得、同会の機関紙「明月記研究」へ発表した。この他にも、本作の上梓により、英語圏における藤原定家、「明月記」の第一人者として評価され、ジュネーブ大学の研究グループが行う中世の月蝕記録と火山活動のプロジェクトの中で、日本資料担当者として招聘され、その成果は2023年、最も権威ある化学雑誌 *Nature* に掲載されるなど、多くの業績をあげられている。また、本作の刊行に至る過程には、著者が京都府立大学などの日本の各大学や研究機関において研究実績を重ねられたことが大きい。

なお、著者は、勤務するワシントン大学において、古典文学の指導を行い、日本の古典文学を正確に理解するための手ほどきを行うなど、その手法は日本における同分野の教育に参考となるところが多々あるとともに、英語圏を中心とした日本古典文学研究に大きな影響を与えた。

以上の理由により、古典文学や言語の研究を通して世界に日本文化を発信し、今後も大きな貢献が期待されるポール・S・アトキンス氏は、第28回山片蟠桃賞の受賞者として相応しく、その功績を称え、賞を贈呈するものである。

(4)受賞者メッセージ

ワシントン大学 シアトル校 アジア言語文学科 教授
ポール・S・アトキンス

この度、大阪の国際文化賞である山片蟠桃賞の第28回受賞者として選んでいただき、大変光栄に存じます。この名誉ある賞を賜り、審査委員会、大阪府知事、および府民の方々に深く感謝しております。

「水の都」と称えられる大阪、そして非凡な町人学者であった山片蟠桃とのご縁を嬉しく思うと共に、同郷の故ドナルド・キーン先生を始め、過去の受賞者27人のお名前を拝見する時、今後も及ばずながら、このような博識の学者の方々と名を連ねることになると思うと、大変な満足感を覚えます。

そうは見えないかもしれませんが、受賞対象作品『TEIKA』を執筆するのに、15年の歳月がかかりました。その間、諸方より一生返せない学恩も蒙りました。とりわけ、日本学術振興会の奨学金のお陰で2001-02年の学年を日本で過ごすことができました。それはおそらく今までの人生で最高の一年でした。明月記研究会に入会させていただき、会員の方々に定家の日記の読み方を教わりました。私の所属は京都府立大学文学部で、客員研究者として故・赤瀬信吾教授が受け入れてくださいました。赤瀬先生に定家の歌の読み方を教わりました。先生がこの日を迎えられなかったことは、遺憾に耐えられません。この賞を赤瀬信吾先生の思い出に捧げたいと存じます。

これまでの自身の研究ではこのような名誉に値しないと痛感し、勿体なささえ感じずにはられません。それでも、いつか拙作が本当に、そして十分にこの賞にふさわしくなるまで、学問に励みつづけることを決意いたします。たとえ困難な時であっても、この大阪国際文化賞である山片蟠桃賞は、不信に屈せず、忍耐強さを持ち続けるように私に勇気を与えてくれるに違いありません。

夢なれや ほのかにかおる 難波の梅

(5) 山片蟠桃について

山片蟠桃(やまがたばんとう、1748～1821)

大坂の豪商升屋の大番頭として活躍するとともに、『夢ノ代』を著して、封建制下に驚くべき合理主義を展開した、江戸時代後期の町人学者。本名は長谷川有躬、のち山片芳秀と改めた。通称は升屋小右衛門、蟠桃はその号である。

播磨国印南郡神爪村(現、兵庫県高砂市)に生まれ、大坂に出て升屋の別家を継いだ。本家升屋の苦境に際して敏腕をふるい、仙台藩にかかわりつつ、仙台藩および升屋の財政再建に成功した。しかも升屋を、全国数十藩を相手とする大名貸に成長させた。これにより、1805年(文化2年)升屋の親類並み(親類次席)にあげられ、公儀から徳行を賞されてもいる。

学問は、懷徳堂で中井竹山・履軒に儒学を学び、さらに麻田剛立に新しい天文学を学んで、蘭学にも深い関心を持つに至った。生涯を通じての学問上の成果は、大著『夢ノ代』12巻に集大成されている。卓抜な経済論となえ、一切の神秘主義を否定して無神論を主張するだけでなく、地動説を確認したうえで、宇宙には私たちの太陽系と同じものが無数に存在するという、大胆な大宇宙論さえ展開した。この創意と創見とに満ちた現実的・合理的思想は、近代的世界観成立史上、とりわけ光彩をはなつものである。